

KGK Journal

KGKジャーナル 小 家 , 技 ・ 家 の 教 育 情 報 誌

Vol.46-2・家

通 巻 3 8 3 号 ・ 家

2 0 1 1

家庭分野
特集号



CONTENTS

教育点描

アクティビティケアと家庭科教育／

多田 千尋 -1

特集／

新教科書と学び

教育の目

学びの具体がみえる教科書作り／

大竹 美登利 -2

新教科書の各内容の特徴

自立と共生をめざして

「自立」する喜びと誇りを体得できる／

鶴田 敦子 -4

家庭生活の基盤を考える学びを／

久保 桂子 -4

ふれ合い体験を充実した保育学習につなげるために／

友定 啓子・倉持 清美 -5

豊かな食生活をつくる力を育てる／

石井 克枝・中村 恵子・野田 知子 -6

安全・快適・豊かな生活をつくる／

生野 晴美・長澤 由喜子・高木 直 -8

持続可能な社会にかかわる消費者をめざす／

赤塚 朋子・西園 大実・鈴木 真由子 -10

自主性を引き出す実践を／

鶴田 敦子 -11

新教科書の特徴としくみ／

編集部 -12

開隆堂

平成24年度完全実施、 新学習指導要領に対応した 開隆堂の新教科書。 いよいよ見本ができました。

今号は、新教科書に込めた“学び”の具体化についての特集です。
新教科書は、

- 効果的な体験学習や実験、事例等を豊富に取り入れています。
- 実践的な学習への多種多様な工夫を盛り込んでいます。

この新教科書とともに、学習指導書をはじめ、授業をサポートするデジタル教科書版、技・家ノート、技・家ハンドブック等のサービスを充実させていきます。

授業をサポートする
開隆堂のサービス体制



教育点描

アクティビティケアと 家庭科教育



多田千尋
(高齢者アクティビティ開発センター)

人はみな、自分らしい幸せを求めて生きています。そのためには、「身体」と「心」の健康が生活をする上で大切になってくるのです。栄養バランスのとれた食事が体の健康に大切のように、心の健康は芸術文化と遊び文化が生活の上に十分に保たれていなくてはなりません。

こうした文化が生活の中で不足すると、心の栄養失調となり、人は生きる力を低下させ、煌めき、輝く人生を失速させます。芸術や遊びは人々にとって、まさに食事と同じくらい大切に、日常的なものです。そのように考えれば、年齢やハンディキャップのいかんを問わず文化の栄養補給は必要です。さまざまな文化と仲良く付き合うことで、自己実現を果たす生き方を求めることが、誰にでも等しく保障されていなくてはならないのです。

福祉が生活文化であるならば、福祉は、こうした生き方を目指す人々へのサポートと考えていきたいと思っています。従来の介護を中心とする手を差し伸べる福祉から、共に文化を創り出す福祉をも加えた、新たな転換を必要と思ひ、そのエッセンスを子ども期から教育しようと思うと、家庭科しかないと思っています。家庭科は福祉を暮らし化し、福祉文化を構築していくものと強く期待したいところです。

一般的に「摂食」「排泄」「入浴」が三大介護といわれています。暮らしの香りがまったくない言葉自体も問題ですが、自己実現を果たすための必要十分条件とはいえません。これは生きていくために必要な、いわば身体のケアで、栄養バランスのとれた食事が体の健康のために必要のように、人生を楽しむためには“心の栄養”補給、心のケアも必要なのです。この心のケアをするためには、三大介護では足りないことは言うまでもありません。三大介護に続き、四つ目が芸術文化、五つ目は遊び文化、そして最後に自然文化までも加える必要があります。こうした六大介護を目指す施設も徐々に増えてきていますが、まだまだ、ゆとりがなく三大介護に手一杯な施設も決して少なくありません。

遊びの中でお年寄りをワクワクさせるものの一つに創作活動があります。今日、デイサービスセンターや老人ホームなどで、さまざまな素材を使った手作り活動はよく見かけるものになってきました。但し、プログラムを与えられ、やらせられる手作りののか、目的を持って進んで作り上げていく手作りののかには大きな違いがあります。

都内のあるデイサービスセンターは、近所の保育園との交流がきっかけで、お年寄りが「でんでん太鼓」作りに取り組んでいました。毎年4月に新しく入園する0歳児保育の子どもたちに、でんでん太鼓をプレゼントしているのです。1年間にたまる事務室のセロハンテープの芯に割りばしを差し込んで、和紙や千代紙でデコレーションし、ワイシャツのボタンで音をさせるものです。保育園側が当初は民芸品店で購入してきたものと勘違いしたほどの出来栄でした。

生命の輝きでまぶしいほどの赤ちゃんたちが、でんでん太鼓で楽しんでいる光景は、お年寄りたちに作ることの楽しさと、役に立つことの手ごたえを感じさせました。

私たち高齢者アクティビティ開発センターは高齢者のQOL*を高めるために、「衣食住」に加え「遊び文化」と「睡眠文化」を幅広く捉えた専門家「アクティビティディレクター」を全国に500人以上誕生させました。これら専門家の底上げを図るためには、「衣食住」を中心とした教科には大きな期待を寄せざるを得ません。

一人一人のお年寄りには、必ず輝いているものがあるはずです。そのような光をキャッチして引き出してあげることが、現場の大切な仕事です。それを新しい時代に羽ばたかせるためには、家庭科とアクティビティケアの文化協働が肝要になってくるのではないのでしょうか。

*QOL：クオリティー・オブ・ライフ。
「生活の質、生命の質」と訳される概念。

タダ チヒロ

1961年東京都生まれ。高齢者アクティビティ開発センター、東京おもちゃ美術館館長、早稲田大学、お茶の水女子大学講師。乳幼児から高齢者までの遊び・芸術によるアクティビティケア及び世代間交流の実践・研究に取り組む。また、青年海外協力隊訓練校での10年間の「コミュニケーション論」の講義に対して国際協力機構 JICAより感謝状を受け、「週刊ダイヤモンド」では「日本の社会起業家30人」の一人にも選出される。高齢者・障がい者のQOLの向上を目指す「アクティビティディレクター」を全国に500名以上養成している。平成18年文部科学省中家庭科学習指導要領の改善委員を務める。

[特集]
新教科書と学び

大竹 美登利

学びの具体がみえる教科書作り



オオタケ ミドリ

現在、東京学芸大学副学長・教授、日本家政学会会長。
東京学芸大学附属小金井小学校校長、日本家庭科教育学会副会長、小金井市食育推進会議議長等を歴任。
共著「ジェンダーの生活経済論」ミネルヴァ書房(2000)、共著「新しい題材・指導事例集 家庭分野」開隆堂出版(2008)、共著「家庭科の本質がわかる授業②生活を見つめる 衣生活と消費・環境」日本標準(2010)

【教科書作りのポイント】

教科書は教師にとっても生徒にとっても最も頼りになる教材です。教科書以外に独自に教材を準備する教師も多いのですが、指導内容の基本は教科書で押さえています。一方、生徒にとって教科書は、学習内容の確認や予習、復習の最大のよりどころです。

そこで新教科書作りでは、生徒がわくわくして手に取ってみたいくなり、また一人でも取り組めるように、学びの具体が見える紙面作りを心がけました。

なお、領域の並びは学習指導要領と同様にしてあります。家庭科の学習に誘う導入に続いて、「B 食生活と自立」を取り上げる教師が多いと思いますが、教師によっては「C 衣生活・住生活と自立」のうち「(2) 住居の機能と住まい方」から入られる方、「D 消費生活と環境」から入られる方など、いろいろでしょう。教師が自由に指導計画を作成しやすいように、領域はパーツ化しています。その一つとして、「C 衣生活・住生活の自立」も「1 自分らしく着る・快適に着る」「2 快適に住まう」「3 生活を豊かにする物をつくる」の3つの小単元に分けて示しました。地域の実態や学習環境、あるいは生徒の実態にそって、それぞれの教師の独自の豊かな指導計画を立てて頂きたいと思っています。



(教科書p.146・147)



(教科書p.148)



(教科書p.175)



(教科書p.188)

【学びの展開が見えてくる教科書】

新教科書では、学びの具体的な展開が見えてくる紙面作りを心がけました。

例えば、「幼児とのふれ合い体験」学習では、近隣の受け入れ体制の問題などで、なかなか思うような実習が展開できない学校も多いようです。新教科書では、ふれ合い体験として4つの方法を提示し、多様な学習環境に合わせたふれ合い体験が展開できるような例示を提案しています。



(教科書p.52・53)

また、調理実習では、教科書を見ながら生徒が自力でも調理できるように、手順を写真入りで提示しています。これは学校での実習を自宅でも作ってみるのに役立ちます。また、時間が無くてできなかった実習でも、生徒が一人でも取り組めるようになっています。

さらに肉、魚、野菜ごとに、日本全国の特産を地図上で示しており、その地域でとれる食材を使った食生活の学習を展開しやすくなっています。



(教科書p.112・113)

【具体と結びつけた学び】

家庭科は実践的な学びが多いのですが、領域によっては抽象的な概念を学ぶことも必要です。しかしそうした学びでも、実際の生活に活用できる実践性が求められます。そのために、抽象的な概念を具体と結びつけた学習展開を示しました。

例えば「食品に含まれる成分を、目で見て確かめよう！」という発展ページを設け、抽象的な栄養素を具体の学びにつなげています。

また、とかく8つの権利と5つの責任を覚える学習で終わってしまう「消費者の権利と責任」も、身近な事例を取り上げ、日常の生活の中での活動と結びつけて示しています。



(教科書p.222・223)

【実物大の写真の掲示】

家庭科では授業で具体物を持ち込んで学習を展開することが多くあり、このことにより、生徒に親しみやすい教科となっています。これは家庭科の強みであるとも考えます。新教科書でもそれを表現したいと考え、手形と足形の実物大写真、食品の実物大写真を掲載しました(本誌p.6 参照)。



(教科書p.32・33)

「自立」する喜びと誇りを体得できる

鶴田 敦子（聖心女子大学教授）

いよいよ大人の仲間入りの入り口に入った中学生です。生活的自立のための知識や技術を身につけるようはげましたいと思います。加えて精神的自立も思春期の重要な課題です。自立と「共生」との関係は？ 少し、難しいことも考えさせながら、自立することに誇りをもって取り組めるように編集しています。



●クラスメイト間のコミュニケーション重視

授業びらきは各自が小学校の学習を紹介しあったり、数多くの頁の導入課題は、クラスメイト間の討論が多々提起されたりしています。



コミュニケーション能力を培い、それを通じた仲間づくりが縷々展開されています。

●問題解決学習としての授業が流れている

多くの頁は以下のように構成されています。

めあて→生徒の身近な生活を題材にした導入課題→課題に応じた本文・資料等→頁によってはさらなる小課題・振り返り・学習のまとめ。

生徒が一人で読んでもわかり教師が授業でそのまま使用できる問題解決学習が流れています。

●「なぜ」がわかり、視野が広がる

学校で家庭科を取り立てて学ぶ理由は、「なぜそうなのか」の科学がわかったり、身近で気づかないことを伝統文化や国際的な視点から眺め、生活の仕方を振り返ることができるためです。この視点から豊かな資料を使用しています。



日本・マリ共和国の家財道具（教科書前見返し）

家庭生活の基盤を考える学びを

久保 桂子（千葉大学教授）

家庭は日々の生活の拠りどころであり、身を守り、休息し、また、明日活動する力を蓄える場所です。そのためには、衣食住の生活を支える活動が行われるとともに、一緒に暮らす人びとの関係が精神的に安らぐ関係であることや、経済生活が安定していることなど、安全で安心感に満ちた環境が整えられる必要があります。また、家庭につながる地域の人びとが相互に協力し地域の活動を支えるとともに、社会全体が安全で安定していることも大切な条件です。

新教科書では、このような家庭生活と地域、社会とのつながりを重視し、それを考えながら学習できる構成にしました。



災害時の対応訓練に参加する中学生

そして、家族の関係が精神的に安らぐ関係になるための学びとして、ロールプレイング（役割演技）を取り上げました。

家族といえども、それぞれ個性をもった個人の集まりです。家族というまとまりで生活するときには、違いを認めながら相互に尊重し、相互の気持ちを調整しあうことが重要です。ロールプレイングで、違う人の立場を想像して演じることによって、相手や自分の気持ちを理解し、人間関係の背景や解決方法を考えることができます。手順例とともに設定例も示し、取り組みやすくしました。

また、中学生がこれからの自分のことや家族とのかかわり考える学習では、家族の多様な形態への理解を深められるように工夫しました。現在の家族が多様であるとともに、私たち自身もさまざまな家族を経験し、これからも経験する可能性があります。そのことに気づくように、家族にかかわる出来事を取り上げてみました。離れて暮らしていた祖父母との同居、親の再婚による新しい家族との出会いや、親の離婚や家族の死による家族との別れなど、自分の選択である場合もありますが、自分の意思にかかわらず経験することも数多くあります。家族相互の関係は常に変化するとともに、家族そのものが変化の可能性をもった存在であることに気づくことができました。

さらに、男女共同参画社会基本法、育児・介護休業法、子どもの権利条約などの法律や条約を取り上げ、現在の家族・家庭にかかわる社会の理念についての学習を行えるようにしています。

ふれ合い体験を充実した保育学習につなげるために

友定 啓子（山口大学教授） 倉持 清美（東京学芸大学准教授）

●自分の体験を通して幼児を知る

幼児とふれ合うことの少ない生徒が、幼児に関心をもつことができるように、導入課題を設定しています。自分たちの過去を振り返ったり、似たような体験をしたりして、中学生が自分の具体的な体験を通して幼児にアプローチしていけるようにしています。また、逆に幼児について知ったり考えたりすることが、生徒が自己を見つめることにつながるように配慮しています。

また、考えたり感じたりすることと同時に、幼児の発達や家族の役割について、知識や理解の点で押さえておくべきことははっきり示すことに留意しました。メリハリのあるページ構成です。

●家族や地域との関連

新学習指導要領では、「家族・家庭と子どもの成長」が重視されていることを踏まえ、配列も家族領域との関連をもたせています。また同時に、保育の中では幼児とのふれ合い体験が大きな比重をしめるようになってきましたので、幼児の成長にかかわる学習が、後のふれ合い体験に生きるように、例えば子どもの成長と地域との関連をていねいに取り上げるなどしています。

●理論と実践をつなぐ製作学習

おもちゃなどの製作活動を、幼児に関する理論的な学習とふれ合いなどの体験学習をつなぐものとして位置づけています。この製作活動を通して、生徒が幼児の発達の特性に気づいていけるように、教材の配列も発達を考慮したものになっています。個人差を考慮しながらも、幼児の発達について具体的に考えていく力が重要だからです。

また、限られた時間数の中でも製作が可能ないように、身近な素材を用い、中学生と幼児が製作の過程も楽しめるようなものを取り上げています。見た目は単純に見えても、幼児の前に持って行ったときに生徒と幼児とのかかわりを引き出すことができるものを重視しました。それによって中学生が幼児の世界に触れることができることを願っています。



おもちゃのビーちゃん（教科書p.44）

●幼児とのふれ合い体験

幼児とふれ合うことによる学びを確実にしていくためには、事前に課題をもってふれ合い体験に臨み、事後に体験を振り返ることが大切になります。新教科書では、「ふれ合い体験の前に」「ふれ合い体験をする」「ふれ合い体験を振り返る」と3つの場面に分け、学びが深まるような工夫をしています。

「ふれ合い体験の前に」では、生徒が課題をもちやすいように例を示したり、幼児とかかわることへの生徒の不安を払拭するために、さま



幼児とのかかわり方を考えよう（教科書p.50）

ざまな場面を想定して、幼児の気持ちを代弁しています。「ふれ合い体験をする」では、「保育所や幼稚園などに行ってみよう」「幼児を学校に招待しよう」「子育て支援センターや児童館へ行ってみよう」と3つのパターンを示し、生徒が各々のふれ合い体験でどんなことができるのかイメージがわきやすいように、活動の具体例を豊富に挙げています。

また、ふれ合い体験に行くのが困難な場合に、それに代わる方法を例示してあります。

「ふれ合い体験をふり返る」では、生徒の個人的な体験をクラスで共有できるようにしています。

ふれ合い体験では、楽しいことばかりではなく、困ったこともあるでしょう。そうした経験を、幼児理解やかかわり方の工夫につなげられるようにしています。

生徒は、幼児のかわいらしさに触れ、幼児に対して肯定的なイメージをもつようになりますが、それと同時に幼児なりにさまざまな思いをもっていることに気がつきます。

事前に、幼児の発達のな特徴と関連づけて幼児のさまざまな思いの存在に気づかせておくことで、生徒はふれ合いの中でそれを受けとめることができます。



新教科書では、生徒が幼児の気持ちを考えながら、かかわり方を工夫できるような紙面構成にしています。豊かなふれ合い体験・保育学習となるように、ぜひご活用ください。

豊かな食生活をつくる力を育てる

石井 克枝 (千葉大学教授)

中村 恵子 (福島大学准教授)

野田 知子 (帝京大学教授)

●栄養素を簡単な実験で見せます

栄養素と食品のつながりはむずかしく、教師の一方的な話になりがちです。そこを何とかわかりやすくしたいと考え、食品に含まれる栄養素の実験の写真を見開き2頁に示しました。市販されているうがい薬を使ったとても簡単な実験です。1つでもやってみると、生徒の目が輝きます。食品に含まれている栄養素を実感し、栄養素と食品のつながりがわかるようになります。



(教科書p.76-77)

●食品の大きさと重さを実感します

中学校での食生活学習では1日に必要な食品の概量を知ることが重要な課題となっています。食品そのものを見てほしいという思いから実物大の写真を載せ、大きさとその重量を示しました。食品の概量把握に役立ててほしいと思っています。また、82頁には1日の献立に使用した食品を6群に分けて示しています。これを利用して1日分の献立作成をしてみてください。栄養の学習、食品の学習、調理の学習、献立の学習、そのたびにこの頁を活用していただきたいと思って作りしました。繰り返し使ってください。



●6つの食品群の分類と栄養素の関係

栄養のバランスをとるために食品を組み合わせるとことが大切だといいますが、数多くある食品をどう選んだら



(教科書p.83~85 三つ折り)

よいのでしょうか。そこで考えられたのが6つの食品群です。食品と栄養素の関係として、栄養素についての説明と6つの食品群とつないでいます。6つの食品群の活用で簡単に栄養バランスをとることができることを実感してもらいたいと考えています。



(教科書p.74-75)

●一尾の魚には教育力があります

中学生の調理実習課題は、肉、魚を用いて焼く、煮るという調理法での調理、すなわち主菜をつくり、いも、野菜で副菜をつくることです。その中で1尾の魚を用いた調理学習は、魚という命をいただくという時間を伴い、魚をさばくことで高度な調理技術を習得し、達成感が得られ、教育力のある教材です。生徒は真剣に魚に向き合い、たくさんのことを学びます。また、調理実習のポイントになる火加減や時間を示し、おいしく作るコツがわかります。



いわしの手開きのしかた(教科書p.120)

●食事と体の関係を科学的にみてみよう

何気なく食べている食事が自分の体の健康に直結していることを実感してほしいと願い、コラムには生物学者の福岡伸一さんに執筆いただきました。体と食事との関係を科学的に考えるきっかけにしてほしいと思います。

●安全な食生活を送るために

現在は食の安全・安心にかかわる事件や事故を目にする機会が多くなりました。安全な食品を正しく選ぶためには、賢い消費者とし

て、食品を見分ける目を養う必要があります。「食品の選択と保存」では、生鮮食品の特徴と選び方、加工食品の分類や表示・マークの見方、加工食品の選び方について、わかりやすく解説しました。

また、食品添加物や食品広告については、いくつかの考え方を紹介し、生徒たちが話し合うきっかけを提供しています。食品選択には、消費者として何を大切にするかという考え方が反映されることが伝えられればと考えました。とくく教室での授業になりがちな内容ですので、食品の保存を考え市販品と比較するきっかけとして、「りんごジャム(発展)」を載せています。

●実習の流れを実感し、調理に対する興味がわきます

「調理をしよう」では、食事計画、準備、調理、盛りつけ・配膳、試食、後かたづけ、反省・評価に至るまでを見開きページで示すとともに、環境に配慮するポイント、食中毒に注意するポイントをわかりやすく示しました。1本のきゅうりを使ったいろいろな切り方の例、和食と洋食の配膳と盛りつけ写真、だしの取り方や「おいしさ」に関する実験ページもあります。

●お弁当からお菓子づくりまで

調理実習のページでは、肉、魚、野菜の食材別料理の他に、発展として「弁当をつくろう」を入れました。写真を用いながら、献立の考え方や弁当の詰め方を示すとともに、外で食べるお弁当や大人の和風弁当などの例を挙げました。食育として「お弁当の日」を実施している中学校も増えているようです。そんな際にも活用できるページになっています。また、「お菓子をつくろう」では、幼児のおやつにも使えるメニューが載せてあります。



(教科書p.130-131)



(教科書p.132-133)

●地域の食材と郷土料理がわかる多くの写真と例

口絵も含めて、すべての都道府県の郷土料理を掲載してあります。まずは自分の地域の郷土料理の例として何が載せてあるかな?と探して見ると良いでしょう。写真や作り方や謂われ等を読んだり情報交換をすることで、地域の食材と食文化に興味がわいてくるでしょう。



(教科書p.8-9)

●地元の郷土料理や行事食を生活に生かすきっかけに

それぞれの地方の気候風土と歴史の中で多様な食文化が受け継がれてきたことを「小麦を使った各地の郷土料理」「正月のお節」「各地の雑煮の例」等で具体的に理解できるように工夫しています。教科書の学びが、地元の郷土料理

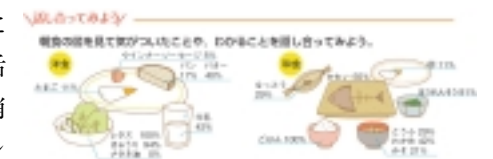


や行事食についての学びのきっかけになり、行事食を生活に生かすことができるように工夫されています。各地の雑煮の例(教科書p.137)

●食生活を地域と世界へ目をむけて考える

「毎日食べる朝食を日本で生産されるものだけでつくった場合」の朝食をイラストで表しました。この図をもとに話し合ってみるとよいでしょう。

また、環境に配慮した食生活では、地産地消費やフードマイレージ、バーチャル・ウォーターなどの指標も取り上げています。『世界がもし100人の村だったら たべもの編』からの抜粋は、日々の食生活のありようを深く考えさせてくれます。



●具体的にわかる調理の基本—身体ではかる

「塩少々」「塩ひとつまみ」、食品を手ではかる「手ばかり」の例を写真で示し、日常の調理で、はかりがなくても身体ではかることができるように提示しました。まさに生活に結びついた提案です。

安全・快適・豊かな生活をつくる

●衣服のライフサイクルを意識し、衣生活のストーリーを組み立てる

小学校では衣服の快適な着方と手入れを学びます。中学校ではこれに、衣服を選択する視点(社会生活上の着方、既製服の購入)がスパイラルに加わり、衣生活全体を捉える段階になります。生活者としての自立の基礎を養うためには生活をデザインするという視点が欠かせません。衣服のライフサイクル(原料、製造、入手、着用、手入れ、再利用、廃棄)を意識し、資源・環境とのかかわりや社会の問題にも関心をもち、衣生活を1つのストーリーに組み立てて学ぶことができるように配慮しています。

●衣服でコミュニケーション

ひとの第一印象は数秒で決まるといわれ、衣服はその重要な要素です。自分に似合う色や着装を見つける実習は生徒の関心も高い授業でしょう。衣服は他者や社会とのコミュニケーションツールのひとつであることを認識することが大切です。

文化や伝統、国際化の観点から、ゆかたの着方や武道着、世界の衣服を紹介しています。衣生活文化への関心を高めて、生活の課題と実践に発展させることができますようにしています。



3 上前(左前身ごろ)を重ね、結びをしめる。
4 そで付け下のあき(身八つ口)から手を入れて、おはしよりを整える。

ゆかたの着方(教科書p.155)

●生活を科学する目を大切に

衣服の手入れでは失敗例の写真を示し、素材の性質を踏まえた合理的な方法の必要性を実感できるようにしています。汚れの性質と落ち方、洗剤使用量と水質汚濁の関係がわかる実験例も示し、具体的な事象と原理を結びつける工夫をしています。洗濯やアイロンかけ、補修等のプロセスをなぜの観点から考えて科学的に理解することが生活実践



洗濯方法によるセーターの縮み方の比較(教科書p.160)

に生きるのです。探求型の学びを工夫することによって、社会や科学技術の変化に対応した持続可能な社会のためのライフスタイルを目指しています。

●住まいの安全と安心をつなぐ

新学習指導要領の住生活に関する学習内容については、小学校と中学校で重複する内容が整理され、中学校では「安全な室内環境」を重点的に扱う考え方が示されました。そこで、新版では、住まいを「安全」に整えることを通して、「安心」できる住まいを実現できる力を子どもたちに付けたいと考えました。家族の家庭内事故、自然災害、あるいは化学物質やカビ・ダニ、一酸化炭素などの室内空気汚染から家族を守るための「安全対策」が、基礎的・基本的な知識として取り上げられています。しかし、安全対策に万全はありません。共に住まう家族や地域の人々の協力や見守りによって、安全策のほころびを埋めることができこそ、誰にとっても居心地がよく「安心」できる快適な住まいが実現します。住まい方の工夫には、周囲の人々を巻き込んだほころびの繕い方を含みます。「住まいのはたらき」としての居心地のよさは、一人では手に入れられないことに気付かせるための工夫が随所に組み込まれています。



家の中の事故・ヒヤリハット(p.180)



(教科書p.174・175)

●住まいの生活文化を見直す

「快適に住まう」の扉(p.174・175)には、9枚のさまざまな住まいの写真が登場します。住まいの外観は気候風土によって異なります。家の仕事によっても異なります。ここで注目したいのは「住まいの生活文化」です。現行版では、「家族や自然とともに」をテーマとしましたが、新版では、家族や自然とともに生活を営む過程で創り上げられた「生活文化」に目を向ける意味で、現行版からのバージョンアップが図られています。例えば、「住まいのはたらき」における「共に住まう」では、「床の間と続き間」(p.179)、「快適な住まい」における「住まいと音」では「地域の音風景」(p.187)が、新たな視点をもつ参考資料になっています。小学校では、自然の力を利用した快適な住まい方の知恵として、打ち水やスタレなども取り上げます。中学校では、さらに人々が集うための空間のしくみや生活風景の豊かさに気付き、それを継承することの必要を考え、「世界の住まい」(p.202・203)に発展的につなぎたいものです。思考力・判断力・表現力等の活用する力を育むために、生活の営みのしくみとして「生活文化」の価値づけを大切にしたいと考えました。



住まいの生活文化



(教科書p.202・203)

●「生活を豊かにする」ことを考える

現代の生活は多種多様な物が溢れ、何でも手に入るようになってきました。しかし、真の豊かさは物をたくさん持つことではないことに気づいて欲しいものです。p.190には、「衣生活や住生活を豊かにすること」についてたくさんのヒントが挙げられており、考えが深められるようになっています。グループでの話し合いに活用したり、自分らしい工夫ができるように課題を見出すためにも活用できます。

生野 晴美(東京学芸大学教授) 長澤 由喜子(岩手大学教授) 高木 直(山形大学教授)

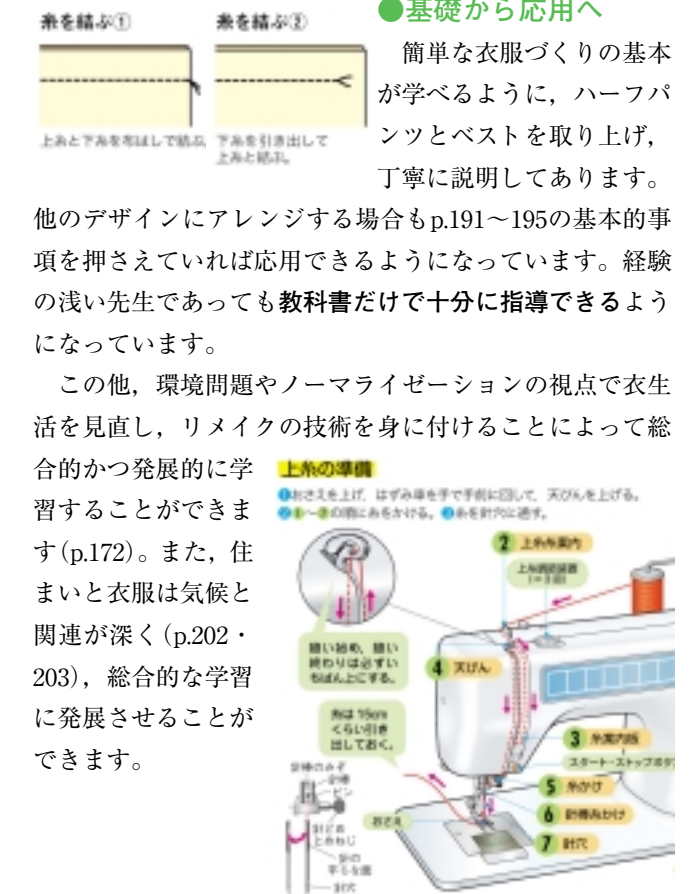
●さまざまな製作物に対応

「生活を豊かにするもの」は一人ひとり異なりますのでそれらの製作に個別対応するのはとても大変です。新教科書では、比較的短時間で製作できる小物をたくさん掲載し、簡単でありながらも基本の縫い方が学べるように配慮されています。特に、どのような物を製作する場合にも必要な縫製の基礎的技術をp.191~195にまとめて掲載してありますので、活用しやすくなっています。

●基礎から応用へ
簡単な衣服づくりの基本が学べるように、ハーフパンツとベストを取り上げ、丁寧に説明してあります。

他のデザインにアレンジする場合もp.191~195の基本的事項を押さえれば応用できるようになっています。経験の浅い先生であっても教科書だけで十分に指導できるようになっています。

この他、環境問題やノーマライゼーションの視点で衣生活を見直し、リメイクの技術を身に付けることによって総合的かつ発展的に学習することができます(p.172)。また、住まいと衣服は気候と関連が深く(p.202・203)、総合的な学習に発展させることができます。



製作して、活用しよう(教科書p.196~201)

持続可能な社会にかかわる消費者をめざす 赤塚 朋子 (宇都宮大学教授) 西薊 大実 (群馬大学教授) 鈴木 真由子 (大阪教育大学准教授)

●消費生活における自立とは

消費社会の進展に伴い、中学生はさまざまな物資やサービスに囲まれています。特にインターネットや携帯電話などの情報通信サービスが身近に存在するなか、自分自身で購入するかしないかの決断を迫られる場面が今後ますます増加するでしょう。生活に必要なものとは何か、それらはどこから来て、どのように手元に届き、どのくらいの量をどのくらいの期間でどう使うのか、これらは生活そのものをどうしたいのかにかかわっています。しかし、中学生はそのことを自覚しているのでしょうか。消費生活においては



受身になりがちです。こうした現状をふまえて、中学生が消費生活において自立するために必要な学びとは何かに重点を置いた構成となっています。

小学校家庭科での学習との連続性・系統性を意識した導入「生活するために必要なもの」のふり返りや「お金や物資・サービスが循環することで成り立つ」消費生活のしくみをわかりやすく図示するなど、身近な消費生活をイメージできるように配慮しました。

また、商品を購入するプロセスを丁寧に記述することによって、生徒たちが実際に消費行動の擬似体験をしながら、基礎的な知識が得られるよう工夫しました。本当に必要なものとは何か、ものの値段がなぜ違うのか、販売方法の利点や問題点を考える頁を設定し、消費生活を自分との関係だけでなく社会との関係も考えられるように構成しています。



生活情報に関連して、暮らしの中のマークを見開きで利用しやすくしています。

そのほか、衣食住など他の領域との関連学習が行えるように「リンク」を示しています。

●消費生活をトラブル事例から具体的・実践的に学ぶ

「よりよい消費生活のために」では、低年齢化している消費者トラブルに注目し、その防止と解決方法について理解することを目指しています。

特に近年は、インターネットや携帯電話など、オンラインサービスに関する相談が増えています。そこで、無料オ



(教科書p.214・215)

ンラインゲームのトラブルについて取り上げ、生徒が「自分ならどうするのか」考える場面を設定し、学習課題を明確にしました。

また、中学生にとって身近な例をロールプレイで演じることから、悪質業者の立場になったり、消費者の心理状態をイメージしたりすることで、消費者トラブルの防止と対策の必要性を理解します。

「消費者の権利と責任」では、具体例について自分なりに考えたり、話し合ったりすることで単なる抽象論にならないよう配慮しています。

消費者の権利と責任が身近な消費生活にかかわっていることを理解するため、見開き2ページで具体例を取り上げました。中学生がオリジナルデザインTシャツを注文する、という事例です。洗濯によるロゴマークの色落ちというトラブルに遭った中学生が、消費生活センターへ相談に行き、相談員のアドバイスを受けて、企業と交渉するために手紙を書く、という設定です。それぞれの場面や手紙の中で、どのような消費者の権利と責任がかかわっているのか、学習成果を確認しながら具体的に考えられるよう配慮しました(本紙p.3参照)。



「消費者を支えるしくみ」では、消費生活を支える機関、法律、制度やルール必要性について理解します。それらの、消費者がトラブルを解決することを助けるしくみを学ぶことが、消費者の自立を支えます。

内容Dでは、ABCとの関連性、技術分野とのリンクも重要になってきます。掲載した課題やデータは、中学生が消費生活を具体的に実践的にイメージするためのヒントになります。

●地球市民として環境とかかわるために

家庭分野の新指導要領では「D 身近な消費生活と環境」として、「環境」の語が表題に格上げされました。このように重要性が増している課題を、限られた授業時間の中でコンパクトに、かつインパクトのある授業展開ができるか。この点を配慮して、環境の内容構成を考えました。

新指導要領の方針を示した中教審の答申(2008年)では、環境教育が『社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項』のひとつとして明記されました。その内容は、地球温暖化、オゾン層破壊などの地球環境問題、ごみの増加、水質汚濁などの都市・生活型公害問題の解決に向けて、一人一人が環境保全に主体的に取り組み、持続可能な社会を構築することが強く求められているとしています。そして、技術・家庭科においては、資源や環境に配慮したライフスタイルの確立、技術と社会・環境とのかかわりに関する内容の改善・充実を図るとしています。

これを受けて、地球温暖化、水質汚濁、ごみ問題という3つの重要な環境問題について、本章では「エネルギー消費とCO₂排出を減らす」、「水を節約し、排水の汚れを減らす」、「環境への影響を考えた消費生活」を設け、中学生が自らの生活で、あるいは家族の一員として実行できる内容が考え



られるようにしました。環境に配慮した生活を実行するポイントは、生活場面でのインプットとアウトプット(投入資源と排出物)をきちんと認識してコントロールすることです。ここでは、省エネと温室効果ガス、水資源と生活排水、資源とごみ・3Rといった、それぞれの問題に関する内容を、わかりやすく整理しています。

続く総合的な項目「持続可能な社会へ向けて」では、循環型社会の考え方を示しました。これは、いろいろな環境問題の要素を複合的に含み、また活動の場としては家庭から地域への広がりを意識した、まとめた内容です。

今回の改訂は、今世紀最大の環境問題である地球温暖化に対応した生活のあり方を取り上げた点が、大きなポイントです。これら環境問題についての詳しい情報を、発展「広がる環境問題」のページとして付してあります。



自立した地球市民として育っていく中学生と、その支援をする先生方に、本章が一助となれることを願っています。

自主性を引き出す実践を

鶴田 敦子 (聖心女子大学教授)

●A～Cから独立して記した「生活の課題と実践」

独立して示した理由は以下にあります。

- ①時間数が不足している現状では、この内容を通常の授業の中に組み込むことは難しく、複数の「内容」の終了後、比較的長期の休業を利用して実施されることがある。
 - ②「生活の課題と実践」に取り組むための各「内容」に共通した基礎的な「事項」は、一箇所に記した方が生徒にとってわかりやすい。
- その上で、各「内容」から分離した短所を補うために「事項」と結びついている課題例を可能な限り数多く列記するようにしています。

●わかりやすく詳細な課題学習の進め方の基本

以下の柱に、さらに詳細な例を示して(ここでは省略)誰もが課題学習を進めることができるようにしました。

1. 生活を見つめる
2. 課題を決める
3. 探求の方法を考え計画を立てる
4. 実践する
5. まとめる・発表する
6. 振り返る・生活に生かす



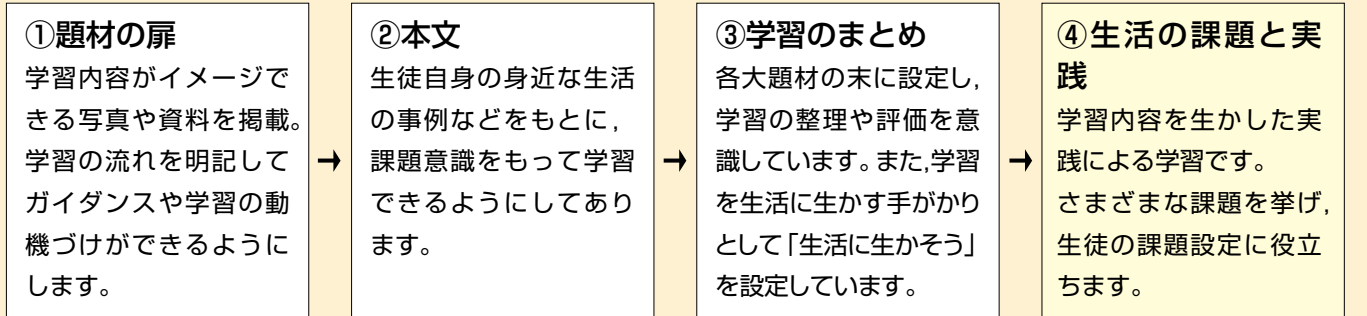
●21課題の例と進め方

課題21例(A内容9例、B内容7例、C内容5例)の進め方を順を追って具体的に例示し、生徒がどの方法を選んでも取り組めるようにしました。

- 課題例 3 地域の活動に参加して、地域の高齢者などとふれ合い、自分にできることを考える
- 課題例 6 布を使って幼児の生活に役立つものを制作し、幼児への理解を深める
- 課題例 6 地産地消について調べてみる
- 課題例 7 お節料理づくりに挑戦する
- 課題例 1 家にあるふるしきや残り布などでリフォーム、エコバッグやはし入れ袋、なべつかみ、スリッパなどの製作
- 課題例 4 自分にできる安全・安心な暮らしの工夫
①リフォームで防災グッズの製作

● 新教科書の特徴としくみ ～課題をもって、生活の自立をはかり、人やものと共生していくために～

◆新教科書は、14～15頁の学習のしかた（「人やものとかかわりながら学ぼう」）で総括的に示しているように、生活の自立をめざし、調べたり、考えたり、話し合ったりしながら主体的に学ぶこと、生活を見つめ、学習したことを生活の場に生かすことへの工夫をしています。



学習課題
(具体的な学習項目)

学習の目標
(学習項目のねらいを明示)

学習の参考
(学習項目への興味を引き出し、その理解に役立つ参考を設定)

導入課題
(身の回りのことをもとにした課題を設定)

課題を解決するための学習内容や資料
(基礎的・基本的事項)

年齢性別	エネルギー (kcal)	たんぱく質 (g)	脂質 (g)	炭水化物 (g)	鉄 (mg)	カルシウム (mg)	ビタミンA (μg)	ビタミンB1 (mg)	ビタミンB2 (mg)	ビタミンC (mg)	ビタミンD (μg)
3～6歳 男	1,200	28	800	8.8	480	5.7	46	2.6	5.0	9.0	1.2
3～6歳 女	1,200	28	800	8.8	480	5.7	46	2.6	5.0	1.2	
7～10歳 男	2,000	60	1,000	11.0	750	5.4	5.8	3.0	3.5	9.0	1.5
7～10歳 女	2,000	58	1,000	11.0	750	5.2	5.4	3.0	3.5	9.0	1.5
11～14歳 男	2,700	68	850	8.5	900	5.5	5.7	3.0	4.5	9.0	1.5
11～14歳 女	2,300	58	850	10.8	800	5.2	5.4	3.0	4.5	9.0	1.5
15～17歳 男	2,800	62	850	7.8	880	5.4	5.6	3.0	5.5	9.0	1.5
15～17歳 女	2,000	58	850	11.0	700	5.1	5.2	3.0	5.5	9.0	1.5
20～49歳 男	2,450	68	700	7.5	850	5.3	5.5	3.0	5.5	9.0	1.5
20～49歳 女	1,900	58	850	11.0	700	5.1	5.2	3.0	5.5	9.0	1.5

数値や説明だけではわかりにくい事象を目で見えてわかる資料にしています。

見通しと課題意識をもって主体的に学ぶことができます。

資料を生かした実践的な課題を設定。知識、技術の定着を図ります。

学習のまとめは、自分の考えを言葉でまとめる力(言語活動・コミュニケーション能力)を育て、クラスメイトとの交流を図ります。交流によって得られるさまざまな課題への視点は、自己の生活課題の抽出に役立ち、生活の課題と実践への自主的な取り組みを導きます。

学習のまとめ

食生活と自立 B

学習をふり返ろう

- ① 中学生に必要な栄養には他の年代に比べてどのような特徴がありましたか。
- ② 食品群別摂取量のめやすにしたがって、一日分の献立をつくることができましたか。
- ③ 生鮮食品や加工食品の購入にどのようなことに気をつけなければいけなかったか。
- ④ 朝と夕の献立に合わせた料理やデザートはどのような料理方法がありましたか。
- ⑤ 自分の住む地域の土産品を挙げてみましょう。また、地域の食材を料理するようになりましたか。

生活に生かそう

- 「食生活と自立」の学習を通して、自分の食生活の課題を見つけることができましたか。
- 「食生活と自立」の学習を通して、もっと学習を深めたいと思ったことがありますか。
- 食生活の自立に向けて、学習したこととどのように生活に生かしていきたいと思えますか。

自分の思っていることをまとめ、クラスで互いに交流しましょう。

もっと知りたいこと

生活の課題と実践 B

課題例 1 自分の食生活をふり返って課題をみつけ、改善する

課題を決める

- 1週間の食事記録をとって食品群のかたよりを調べる。

計画を立てる

- いつから何日録記するか、何を記録するかを決める。
- 記録用紙を用意する。

実践する

- 3日間、起床・就寝時刻と食べた時刻と調理名・食品を記録する。
- 食事やおやつごとに食品を6つの食品群に分類する。
- 1日にとりたい食品の種類と分量[2ページ]を参考にし、不足したり、とりすぎたりしやすい食品はないかなど、自分の

(例：教科書p.78・79)

(例：教科書p.82・87)